
東方戦乙女 ~ The Girls War. ~

高木睦月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方戦乙女（The Girls War）

【Nコード】

N3580S

【作者名】

高木睦月

【あらすじ】

人間と妖怪が共存する楽園、幻想郷。

その幻想郷に小さな混沌が生まれ、

次第に大きな戦禍となり幻想郷を飲み込む…。

第初話、巫女さん弾幕小説！

全ての幻想がぶつかる――。

000 大戦前夜（前書き）

本作品は東方projectの二次創作です。

幻想入り小説では無いので、オリキャラが苦手な方にはとても読み易くなっていると思います。

出来るだけ原作を尊重して物語を進めて行きますが、物語の進行上、二次設定が含まれる事があります。

感想など、どんどん寄せてください！

まだまだ若輩者なので、アドバイス等投稿して貰えると、作者はブリッチしたりします。orzぎゃくか

時期柄、新作の神霊廟を入れたいのですが、大体内容が固まっているので今回は不参加、となります。

それでは本作、東方戦乙女をお楽しみください。

大戦前夜

げんそうきょう
幻想郷の春の初月。

幻想郷に異変が起こった。

げんそつきょうたいせん
幻想郷大戦――。

この異変は後にそう呼ばれることとなる。

•

この世界で卯月——俗に言う四月である。

幻想郷ではまだ地表に、
わずかながらも雪が残っていた。

この世界では妖怪や妖精の影響もあってか、気候が曖昧で春でも稀に雪が降ることがある。

春告精もこういつた天候のおかげで顔を出せずじまいでいた。

そんな草の青々とした緑と、雪の清々しい白の幻想的な風景を醸し出す早朝の草原に、まるで場違いなように二つの影が躍り出た。

紅白と白黒である。

「ねえ、なんで魔理沙は留守番しててって言ったのに、ついてくるのかしら」

と、不機嫌に白黒に問い、空中をふよふよと飛ぶこの紅白は——自称『樂園の素敵な巫女』もとい博麗^{はくれいれいむ}靈夢、巫女である。

この少女は赤と白という組み合わせの個性的な衣装をまとい、大きな赤いリボンを頭につけていた。

まあ、巫女が巫女装束を身に着けているのは当然の事だ。少々奇抜だが。

「おいおい靈夢、私に他人の家の留守番をさせるなんて無茶なこと言うなよ」

と、愉快に靈夢に言つて、箒にまたがるこの白黒は——自称『普通の魔法使い』もとい霧雨^{きりさめ}魔理沙、魔法使いだ。

彼女は靈夢とは逆に黒と白の地味な衣装をまとい、典型的な魔法使いの衣装だった。

「じゃあ代わりはいるんでしょうね？」

「ああ、アリスに代わってもらった」

「……不幸ねえ」

靈夢は呆れた様子で魔理沙と共に神社に来た少女を思い出す。

アリス・マーガトロイド、人形使いと言う異色ではあるがれっきとした魔法使いで、魔理沙の同業者である。

どういう理由でかは知らないが、魔理沙にいつもくっついてるそうだ。

「ところで霊夢、この方角だと人里に着くぜ。なんだって人里に？」

「なによ、人の私が入里にいつちや行けない理由でも？」

「なんの目的で行くのかを聞いてるんだよ」

「別に……。ただ、一ヶ月前の例のことで、ね」

「一ヶ月前というと……。あの空から沢山の紙が落ちてきた事のことか」

「そう」

「その紙、持ってるぜ。これの事だろ」

そういつて、魔理沙はくしゃくしゃに丸められた、手に収まるほどの紙キレを取り出し、それを広げ書いてある事を読み上げた。

一ヶ月前——、幻想郷の空から大量の紙キレが降ってきたのである。

正確にはタダの紙キレではなく、御触れのようなものが降って来たのだ。

それには、こう記してあった。

『これより、幻想郷では今季からの春季・夏季・秋季・冬季の第四季間に渡り、ありとあらゆる戦闘行為を自由に行えるものとする』

『本戦争の終了条件は四季後の人の里の支配である』

『本戦争終了後、勝利者はいかなる主張をも通す事ができる』

『この戦争行為においては、スペルカードルールを用いて戦闘を行うものとする。ただし、不慮の事故は覚悟すること。本項目は博麗の巫女にも適応する』

•

「——だよね」

最後にそう言って、魔理沙は腰のポーチに紙キレをしまいこんだ。

「言わなくてもわかってるわ」

と、霊夢は不機嫌そうに言う。

「これさ、最後がいやらしいよな。本項目は博麗の巫女にも適応するってさ」

「本当よ、私が死んだらどうなるのか、これの首謀者はわかってるのかしら」

「ぎゅんぎゅん……どろろろろ？」

「あんた．．．、それ本気で言ったら私のこと、気安く殺しかねないわね．．．」

霊夢は溜め息を一つ吐いて。

「私が死んだら博麗大結界がなくなるってことよ？」

幻想郷は、強力な結界によって幻想郷外部、つまり現実世界と遮断されている。

その強力な結界こそが、霊夢が言う博麗大結界である。

博麗大結界とは、百数十年前に張られ博麗の巫女、現在は霊夢によって管理されている。

この結界は「常識の結界」と言うものであり、外の「非常識」を幻想郷の「常識」に、逆に幻想郷の「非常識」を外の「常識」にすると言う物で、外の世界で忘れ去られた物が流れ着いたりする。

論理的な結界だが非常に強力な物で妖怪でも簡単に通る事は出来ない。

そして、その管理者である霊夢がいなくなってしまうと、外の世界との区別が

つかなくなってしまう、外部からの強過ぎる「穢れ」によって忘れ去られた存在の

妖怪達は行き場を無くし消滅してしまう。

妖怪達はそんな自殺行為などしたくは無いので、博麗の巫女だけは捕って喰ったり出来なかったのである。

「なるほど、よくわかった」

と、言いながらも魔理沙は霊夢の解説がまったくわからなかった様で両手を上げ、お手上げのポーズをとっていた。

「……………はあ、もう一回言おうか？」

「わかってるって言ってるだろうが」

「体はわかっていなさそうだけど」

「なにいつてるんだ、私と私の身体は一心同体だぜ？」

「へえ、じゃあ身体は正直ねえ」

「むう……、ほら、里が見えてきたぞ、じゃ」

霊夢に言い返され、ついに反論できなくなった魔理沙は人里が見えてきたや否や箒で逃げる様に飛んで行ってしまった。

「ああ、そういえば、魔理沙はなんで里に用があるのか、聞き忘れたわ」

今更になって霊夢はそんな事を言い出すと、草原の中に一筋の土が見える場所へ降りたった。

この丁寧に舗装された道は人によって作られた物だ、つまり本当に人里が近いのである。

「さて、この労力が無駄に終わらない事を祈るわ」

霊夢が一人呟いていると、太陽も真上に近づき、春らしい、涼しい

風が吹き抜けた。

001 ヴァンパイアガーデン

時はさかのぼり、霊夢たちが人里へ出発した日の早朝。朝露は残雪に溶け、雀たちが空を楽しそうに舞っていた。

紅魔館――。

その館は、幻想郷での数少ない湖の近くに存在した。

外見は壁、屋根共に紅く染められており、その他の特長としては窓が一つも無いと言う事だろう。

その外見は近づくものに何が潜んでいるのか、という恐怖と不安を植え付け、誤って侵入しないように自然と作用していた。

この館には立派な門と塀があり、さながら門番でもいそうなものであったが、その門前には誰もいなかった。

「るー♪ららーらー♪………」

かわりに館内から奇妙な鼻歌が聞こえる。

その館を覗き込んでみると、まるで迷路のように交差し入り組んだ、だけれど芸術のように美しく、整理された庭園が館周辺を覆っていた。

その鼻歌の主は一人、ジヨウロを片手にその庭園に水をかけていた。

「ふー……、さて、と」

「んーっ………」

しばらくすると、その主はジョウ口を地面に置き、大きく伸びをしたのでその全貌があらわになる。

女性だった。

赤茶色の腰ほどまである長い髪を後ろにさげ、横髪は綺麗に編まれていて、黒いリボンが付いていた。

緑が主体の中華風な衣装を身にまとい、体のラインがよく出ていた。目はパッチリと大きく赤い瞳で、背が高く、体付きもスポーツをやっているかのように鍛え上げられて、見た目二十代前半の元気で活発な女性に見えた。

「美鈴」

美鈴、そう呼ばれた彼女、紅美鈴ほんめいりんは振り向く。

「あ、咲夜さん、おはようございます」

「おはよう、朝からお庭のお手入れお疲れ様、はいタオル」

「ああ、ありがとうございます」

咲夜さん、そう呼ばれた彼女、十六夜咲夜いざなざんやは美鈴と挨拶を交わすと、タオルを渡した。

彼女もまた二十代前半程に見えるが、美鈴と比較して背が小さいので美鈴よりかはいくらか若く見える。

朝日に輝く銀髪は短く切り揃えられ、彼女も美鈴同様に横髪を編み、緑のリボンをつけていた。

目は、まるで獲物を捉えた鷹のように鋭く、その先の瞳はこの館の先の湖のように蒼く透き通っていた。

西洋英国発祥の紺色のメイド服に身を包み、頭にはメイドカチューシャ、ミニスカートのメイド服には幅広のエプロン、そして腰には黄金色に輝く懷中時計が覗かせていた。

体付きは華奢で細く、脚がスラリと長く伸びていてミニスカートがとても良く似合っていた。

美鈴をスポーツ選手と例えるならば、咲夜はモデルのような体型をしていた。

「美鈴、最近起きるのが早いじゃない、いつもなら妖精メイド達にお庭のお手入れをさせているのに……、あら、ところで、メイド達はどこに？」

咲夜はいぶかしみながら辺りを見渡すと、いつもは庭の整備をしているメイド達がこつ然と消えていた。

咲夜の様子を見た美鈴は半分呆れ、半分困り顔で咲夜に言った。

「ああ、妖精達なら庭に来るとすぐに遊んでしまつて全く役に立たないどころか、庭を散らかしていきますからねえ、いつも私が追いつ返しているんですよ。——って、あれ、という事は毎日庭の整備をしているのは私だつて、咲夜さん知りませんでしたか？」

「………、そんなことより、喉が渇かない？ 飲み物を持ってきたのだけれど」

慌てて咲夜は誤魔化す、今まで庭は自分の管轄外だったので気づいていなかったのだろう。

咲夜はこの館のメイド長を任せられている身で、知りませんでしたとはいえないので、大いにスルーした。

「そんなことつてえ……、まあ、飲み物は貰いますけど」

そして美鈴は飲み物が入った容器を買った。

「なんですか、これ？」

「あら、ペットボトルを知らないの？次世代の水筒よ、便利でしょ」

「へえ、あれ、なんですかこれ、引っ張っても開きませんよ？」

咲夜の説明に納得した美鈴はペットボトルのフタを引っ張っていた。我々、現代人にとってはこの光景は大いに笑えるが、幻想郷の住民達にとってはこれが日常茶飯事である。

何せ、我々の技術が何年も遅れて、この幻想郷に迷い込む仕掛けにこの世界は出来ているのだから。

「何やってるの、引っ張るんじゃないで、ひねるの」

「お、おー！」

咲夜が代わりにフタをひねって開けてあげた、ペットボトルはプシツと心地良い音と共に開くと、美鈴は目を輝かせて感嘆の声を上げた。

「凄いいじゃないですか咲夜さん！」

「あなただって出来るわよ、はい、お飲みなさいな」

「あ、はい、いただきます」

咲夜から開封済みのペットボトルを手にとった美鈴は、よほど喉が

渴いていたのか、それをラッパ飲みしてみせた。

口から溢れ、あまり上品な飲み方ではなかったが、それによりどんどんとペットボトルの中身は減っていった。

「ぷはっ・・・、これ紅茶ですか？冷たくて美味しいですよ！」

「毒は無いと」

「え？」

「ああ、独り言よ、その容器はあげるわ」

「あ、本当ですか！」

「じゃ、私は館に戻るから」

美鈴がペットボトルを貰って喜んでいると、咲夜は懐中時計を見てそう言った。

「あつ、ちょっと待、咲夜さ——」

美鈴がそう呼び止めるが、時すでに遅し、突如として美鈴の前から咲夜はいなくなった。

「んー、・・・・・・・・あー言いそびれちゃったなあ」

美鈴はそうひとりごちて、以前からの職務を全うする為にペットボトルを片手で弄び、門へと歩き出した。

「太蔵星君の凶兆」

「今回も何事も無ければいいのだけれど」

.....

紅魔館内部――。

悪魔というものは聖なるものとされる日光に弱い者達が多い。

この館の主も例外では無く、日光に直接当たってしまうとたちまち気化してしまうらしい。

そんな主の為なのか、この館には窓が無いといっているほど少ない。少なくともこの屋敷の大広間や大廊下等の主が活動しそうな場所には一つも窓が取り付けられておらず、日光の代わりかうすぽんやりと蝋燭が点々と距離を取って灯っていた。

パチンッ

そして述べたその大廊下――、奥先を確認できないほどの長さを持つそこはしいんと静まり返っておりネズミ一匹も存在せずただ蝋燭が辺りを寂しくてらしていた。そこに乾いた破裂音。

音の正体は、その大廊下に一人たたずむメイド長。十六夜咲夜のフインガースナップだった。

「メイド達はもういなくなつたわね。丁度良かった」

咲夜がそう呟いているうちにその大廊下に変化が起こる。

なんと薄暗くて先の確認できなかったこの大廊下の先から、一枚の

扉が音も立てず咲夜へと迫ってきていた。そしてその扉は咲夜の目でピタリと静止する。

その静止した扉は間近で見ると、赤い扉に豪華に西洋風な装飾が施されており、大きな両開き戸になっている事から、その先は大部屋になっていると容易に想像できた。

咲夜は両開き戸の左のドアノブを掴んでその先の部屋へと入る。どうやら彼女は左利きらしかった（どうでもいい）。

大廊下の先の部屋――、大広間は人間が百人は優に入室することが出来るであろう広さの部屋だった。まず遙か前方にはまたも大きな両開き戸、しかし先ほどの咲夜が入室した際の扉とは若干異なっておりその扉だけは白く、取っ手やらには金色の装飾が施されていた。蝶番が扉の上方にあり、リンク機構となっていることからどうやらグライドスライドドアのようだった。

その扉の先は厨房になっていて、その更に奥にあるこぢんまりした茶色い片開き戸の先は食料庫になっている。ここの設計のみはどうやら咲夜が務めていたようで、成る程、なかなかに瀟洒なセンスを感じた。

そして厨房がある扉の両側には階段が一つずつあり、そこを上ると広間一帯を見渡すことの出来る高台となっていた、ここからだと上空に吊り下げられた大きなシャンデリアが視界に入る。この部屋だけ、蠟燭が無くいやに明るいと感じたのはこの巨大な光源が存在していたからかと気づく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3580s/>

東方戦乙女～The Girls War.～

2011年10月8日22時43分発行